

【A1】

山梨県奈良田方言の疑問文—準体助詞のない方言におけるスコープ, 事態既定性—

小西いずみ (東京大学)

本発表では、山梨県奈良田方言の疑問文、特にその典型である問いかけ文について記述・考察する。準体助詞のない奈良田方言において、共通語のノ有り・ノ無し疑問文に対応する区別がどのようになされるのかに着目する。

高年層話者を対象とした調査結果から次のことを主張する。(1)奈良田方言の問いかけ文の述語形式には、カが無／有で対立する \emptyset ／カ、ヨ／カヨ／、ヅラ／ヅラカ、ラ／ラカがある。(2) \emptyset ／カは、共通語の \emptyset ／カとは違い、事態成立以外に焦点がある場合や事態の事情や理由を問う場合にも用いうる。(3)ヨ／カヨは、共通語のノ無し疑問文にあたる、発話時の判断を問う文で用いられやすい。(4)ヅラ／ヅラカ、ラ／ラカは自問用法から問いかけ用法に拡張したもので、共通語のダローカよりも問いかけ形式としてさらに進んだ段階にある。このうちヅラ／ヅラカは共通語のノ有り疑問文にあたる用法を持つ。

【A2】

「んですか」に関する一考察—「何を召し上がるんですか？」はなぜ不自然なのか—

庵功雄（一橋大学）

「んですか」には、1) 状況に対する話し手の解釈を聞き手に尋ねる、2) 文中に前提が存在しそれに対応する焦点を尋ねる、という2つのタイプが存在する。ここで、WH疑問文は2)のタイプであり、常に「んですか」が使われ、「んですか」を使っても「カチンとくる誤用」にはならない。しかし、相手に何を食べるかを尋ねる場合に「何を召し上がるんですか?…①」と使うと、カチンとくる誤用になる。本発表ではその理由を考察した。結論は次の通りである。WH疑問文は答えとして総記の解釈を要求する。そのため、WH疑問文は「～のはWHですか?」に置き換えられる。一方、①は「召し上がるのは何ですか?…②」に置き換えられない。これは、①のタイプの文脈では聞き手の意識の中で解答が固まっていないためであり、それにも関わらず総記的に問われると、確定的な解答を強制されているように感じられ、聞き手がカチンとくることになる結論づけた。

【A3】

副詞マダとタ形の解釈—時間副詞との相互作用—

宮田瑞穂（東京大学大学院生）

本発表はマダが動詞のタ形と共起する際の解釈の変化を分析対象とする。(1)のようにマダは運動動詞のタ形と共起する場合、反復的な読みを助ける文脈がなければ解釈ができない。一方で、(2)のようにマダが時間副詞を修飾する場合はタ形が完成相過去として解釈できる。

(1) #去年太郎はまだ自動車工場で働いた。

(2) まだ去年の間に太郎は自動車工場で働いた。

本発表はマダが「特定の時間の継続」を条件とする副詞と規定し、(1)および(2)の例を統一的に扱う。(1)ではマダは参照時以前からのイベント時の継続を要求するため、タ形は参照時をイベント時の繰り返しが含まれる反復相として解釈される。(2)ではマダが時間副詞を修飾し、時間副詞の表す時間幅の継続を規定するのみで、動詞のアスペクトには関与しない。そのため、動詞句の解釈は時間副詞によって規定される。

【A4】

副詞「わざわざ」における<意志性>の考察

許燕（名古屋大学大学院生）

本発表は、副詞セツカクの<意志性>を考察する研究の一環として、典型的な意志副詞とされるワザワザの意味と用法の考察を通してその構文的諸特徴に迫ることを目的とする。

- (1) せっかくお越しいただいたのに、何のお構いもできずすみません。
- (1)' わざわざお越しいただいたのに、何のお構いもできずすみません。(○)
- (2) せっかく風邪が治りかけているのに、無理しないで。
- (2)' わざわざ風邪が治りかけているのに、無理しないで。(×)

このように、セツカクとワザワザは置き換えが可能な場合とそうでない場合があるが、その条件は何か。ここでは、まずワザワザの副詞用法および圧縮用法における構文構造を検討し、次に共起する述語の意志性、さらに文末のモダリティにおける制限を述べることにより、ワザワザの<意志性>を考察していく。

【A6】

形容詞派生動詞「深まる」と「深める」の意味分析

李澤熊（名古屋大学）

本発表では、現代日本語の「深まる」と「深める」について「深い」との関連性を指摘しながら、その意味用法の詳細を明らかにする。考察に当たっては、以下の点に注目する。

まず、2 語を（典型的な多義語ではなく）「単義語寄りの多義語」として位置付けて分析する。次に、「～まる・～める」に見られる<段階性・程度の変化>という意味特徴を踏まえて、この 2 語は認知言語学における「容器」のイメージ・スキーマが深く関わっていると考えられ、<収斂・複雑さ・濃密さ>という意味特徴が抽出できることを検証する。また、形容詞派生動詞に見られる完結的（telic）特性というのは、あくまでも段階性の問題であり、必ずしも最終的な終結点を想定しないということを確認する。さらに、形容詞「深い」との意味の対応関係については、stage-level property と individual-level property などの観点からその要因を探る。

【A7】

形容詞語幹を持つ動詞の一考察—語と句の比較から—

新谷知佳(大阪大学大学院生)

「強まる」「強める」のような形容詞語幹を持つ動詞を分析対象とし、「強くなる」「強くする」のような「形容詞の連用形+なる/する」からなる句との比較を、構造と意味という2つの側面から試みる。両者は、段階性を持った程度変化を表すという共通した意味的特徴を持っているが、語から句あるいは句から語にすべて言い換えられるわけではない。

『毎日新聞記事データ集』2020年版の用例を用いて分析を行うと、語の方が句よりも広く用いられるという使用傾向の違いが見られる。そして、その言い換えには、「変化の結果を表す二格が共起するとき、語から句に言い換えることができない。」「意味の慣習性により語の意味範囲が広い例では語から句に言い換えることができず、語の意味範囲が狭い例では句から語に言い換えることができない。」という条件が存在することを、本発表では主張する。

【A8】

「X-ぶり/-っぶり」に見られる用法と意味—「V 方」との比較を通して—

小薬哲哉（大阪大学）

本発表は、接尾辞「-ぶり/-っぶり」がついた、何らかの「様子」を表すとされる表現（以下「X-ぶり」）について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等に見られる用法を観察し、当該表現が表す意味を考察する。

「X-ぶり」は、前接要素 X に多様な品詞の要素が生起できる（例：男っぶり[和語名詞]、仕事ぶり[漢語名詞]、タフネスぶり[外来語名詞]、飲みっぶり[動詞連用形]、多才ぶり[形容動詞]、うっかりぶり[副詞]）。しかし、これまでの研究では、動詞連用形の事例にのみ注目されることが多かった。

本発表では、まず「N-ぶり」の意味的特徴を考察し、分析を行う。次に、名詞の分析を基点に、動詞連用形が前接する「V-ぶり」について、類似した意味をもつ「V 方」と比較しながら分析を行う。そして、両分析から、「X-ぶり」一般が表す意味を検討する。

【A9】

複数の出自をもつ文法化—新しいミをめぐって—

渡部学（東北大学非常勤講師）

「うれしみ」「つらみ」「やばみ」などの新規な表現（以下、新しいミ）は、一般には未だ「誤用」とされることが多いものの、近年 Twitter などのインターネット（SNS）内の私的なサイバー空間で頻出することが指摘されている。このような表現は、感覚的・感情的・主観的な意味をもつとされている。一方、このような新しいミの文法的な出自を探る試みはまだあまり多くない。そこで本発表では、①伝統的にミをとる形容詞のミ形（重み、痒み、など）、②語幹が *-m* で終わる動詞の名詞形（楽しみ、痛み、など）、そして漢語・和語由来の語（形態素）である「味（ミ）」や「身（ミ）」（甘味、刺身、など）の3つの出自の異なる形態素群が、感覚・感情・身体などの近似する意味的共通性を主要な駆動要因として、新しい意味と働きを帯びた新しいミとして日本語の文法に定着しつつあるのではないかという分析を提案する。

【A10】

談話の焦点からみた係り助詞カの生起位置—万葉集の上代中央語を対象に—

衣畑智秀（福岡大学）

本発表では、万葉集を資料とし、上代中央語の係り助詞カの生起位置について、焦点との関係から行った調査について報告する。その際、焦点に階層性を仮定し、多重に疑問詞疑問を文脈として設定することで、文献資料においてもある程度焦点の特定が可能になる方法を提案する。この方法によって、カの付いた要素は焦点と一致することが最も多いこと、カと焦点の範囲がずれる場合には、焦点の先頭の構成素に付く方が、焦点の後方の構成素に付くよりも 4 倍近く多いことを明らかにする。よって、カの分布は、焦点の先頭の標示をデフォルトとし、例外的にカが焦点の後方に付くと言える。例外的に後方に付く要因には、カの c 統御領域を広げる再構造化と、短い句を好むという音数律の制約が挙げられる。以上の観察や提案から、カの生起には、c 統御という統語的条件に加え、焦点標示を広げる情報構造的条件、音数律という韻律的条件が関わっていると言える。

【B2】

**文の接続に関する談話的制約と CLD 児の言語使用
— 一年少者向け日本語会話アセスメントにおける「報告を伴う謝罪」タスクの分析 —**

新山聖也（筑波大学非常勤研究員）・酒井晴香（筑波大学非常勤研究員）

本発表では、文化的・言語的に多様な背景を持つ CLD 児のことばの力を測る「JSL 対話型アセスメント」の「報告を伴う謝罪」タスクにおいて、日本語を母語とする NS 児と CLD 児の間に見られる文の接続に関する言語使用の違いを取り上げる。具体的には、NS 児が報告を行ったあと文を終えてから謝罪を行うのに対し、CLD 児では報告と謝罪を一つの文に接続する言語使用が見られた。本発表では、まず、NS 児の言語使用について分析を行い、報告を行ってから謝罪を行うという談話展開と関わる文法制約によって文の接続が制限されることを指摘する。更に、CLD 児の言語使用について分析を行い、CLD 児の文の接続において統語的な制約と談話的な制約で習得に差が見られることを指摘する。

【B3】

数量節の2つのタイプ

岡田理恵子 (国際医療福祉大学)

本発表では、節の形で数量を表すもの（以下、数量節）のうち、「太郎は花子が論文を読む枚数の紙を用意した」のような数量名詞を節がとる形式のもの（以下、「数量」関係節）を主に取り上げる。本発表では数量節の条件を統一し、節内に動詞の項が全て現れているものを対象とする。その上で、(i) 節内の遊離数量位置の空所の義務性と、(ii) 島の制約に従うか否かの2点を取り扱い、数量節には統語構造の異なる2つのタイプがあることを示す。具体的には、数量節の中でも分析が進んでいる比較構文と比較しながら、数量節には(1) 空演算子移動が関与するものと関与しないものがあることを指摘する。そして、(2)空演算子移動が関与するものは、統語的に節であり、空演算子移動が関与しないものは、節部分が「主部内在関係節」+「空名詞(ϕ)」という構造を持ち、節部分は名詞句であるという提案を行う。

【B4】

名詞修飾型数量詞構文の意味に関する一考察
— 一義と多義, そして意味選択メカニズム —

奥中淳未 (関西学院大学大学院生)

本発表は名詞修飾型数量詞構文を対象に、数量詞と名詞の意味関係と構文の制約から、数量詞の意味選択がどのように決定されるのかのメカニズムを明らかにすることを目的とする。名詞修飾型数量詞構文は、数量詞と名詞の意味関係から、①属性構文、②属性と部分数量の多義構文と属性、③全数量の多義構文に分けることが可能であり、属性構文の場合は、一義で属性のみを表すことに対して、属性と部分数量の多義構文と属性と全数量の多義構文は属性と数量の意味を同時に含意している。数量詞が数量を表すか属性を表すかは、数量詞と修飾される名詞との関係における「数える-数えられる」が成立するか否かで決定され、それらは、数量詞と名詞の意味関係と構文による意味制約により決定づけられる。本発表では、文中に2つの数量詞が表れる構文を中心に「数える-数えられる」の意味関係から構文による数量詞の意味制約とその決定メカニズムについて考察を行う。

【B5】

「指示詞+固有名詞+ガ」の「予測裏切りの意味」以外の用法について
—具体例の観察を通して—

堤良一（岡山大学）

本発表では、「指示詞+固有名詞+ガ」が、「予測裏切りの意味」以外の意味を表す場合があることを指摘し、データを観察することで、コソアそれぞれについて次のようなタイプの存在を認める。i) 「状況・背景の説明から事態の描写へ」(コソのみ) ii) 「それをやる理由/権利がある」 iii) 「いま話題に上がっている」。i)は、前文脈から場面の転換がなされるような場所に現れる。ii)は多く話者の権利や威厳、責任といったものを表す。iii)は話題に上がっている対象を、評価的な感情を抱きながら指す。指示詞の付与が義務的かという観点からは、i, ii)では義務的であり、iii)では義務的とならない。iii)が評価的な意味を持つことについて、堤(2021)の議論を援用し、若干の説明を加える。

堤良一(2021)「確定性・指示性と評価的意味」『日本言語学会 第163回大会予稿集』pp.316-321.

【B6】

文頭における「というのは」と「ということは」に関する考察

周雪(神戸市外国語大学大学院生)

本発表は先行研究の考察に基づき、文頭における「というのは」と「ということは」の用法を考察した。先行研究の指摘により、「というのは」には「理由」用法、「換言」用法があるということが明らかになっている。それに加えて、本発表の考察により先行研究では指摘されていなかった「転出」、「話題転換」用法も存在すると主張する。また、「ということは」には「帰結」用法だけがあると主張する。そして、以下の 3 類型に分けられる。すなわち、先行研究で指摘されていた a 型：前件→後件、b 型：前件←後件という類型と、本発表が主張する c 型：前件⇔後件という類型である。

今後の展望として、本発表の結果は「というのは」と「ということは」の複合辞性についての研究との接続が有望である。

【B7】

1 項名詞を主題とする文の考察—新書テキストを素材として—

石原佳弥子（無所属）

本発表は、庵（2019）がテキストの結束装置の1つに挙げる1項名詞が、内部にノ格の必須項を持つことから新出でも主題になれると考え、1項名詞を主題とする文を考察するものである。新書では、1項名詞の主題文は約半数が名詞述語文で、その内の半数が体言止めの文末であった。また、名詞以外の述語でも体言止めの文末に置き換えて、結束性が維持される例が見られる。それは、1項名詞の主題の必須項のノ格が、テキストを1つにまとめる「トピック＝題」となり結束性を維持するため、文末の情報がなくなるからと考えられる。1項名詞の主題文は、新たな話題を導入する前景的な叙述ではなく、「トピック」の情報を付与する後景的な文であり、そのほとんどが1文限りの主題であった。以上から、1項名詞の主題文が「は」の文の性質を強く持つものではないと結論づける。庵功雄（2019）『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房。

【B8】

**補助動詞テミルと아/어 보다(boda)の日韓対照研究
—試行から婉曲的表現への拡大を中心に—**

武中清香（一橋大学大学院生）

本発表は、試行から婉曲的な表現へと拡大していく、日本語の補助動詞テミルと韓国語の補助動詞보다 (boda) の両者の違いについて論じる。テミルも보다 (boda) も基本的に試行を表すという点で対応しているが、婉曲的な表現として表れた際に、違いが見られる。本発表では、試行を表すものをA型とし、また、試行から婉曲へ拡大していったもののうち、日本語と韓国語で対応しているものをB型、韓国語のみで見られるものをB'型に分類する。B型は試行の意味も含まれるが、B'型は特別な文脈がない限り、試行の意味を含まないものである。日本語のテミルは、婉曲的な表現へと拡大していても、試行の意味が含意されており、試行から婉曲までが連続的であると言える。一方、韓国語の보다 (boda) は、試行の意味から拡張し、文法化することによって、婉曲的な表現になっていると言える。

【B9】

**中国語母語話者と韓国語母語話者による受身構文の使用実態
—日本語母語話者との比較を通して—**

何月琦（名古屋大学博士研究員）

本研究では、「I-JAS」「YNU 書き言葉コーパス」という 2 つの学習者コーパスに収録されている 16 タスクの作文 1,224 編を用いて、日本語母語話者、中国語を母語とする上級学習者、韓国語を母語とする上級学習者による受身構文の使用実態を考察した。その結果、受身構文タイプの使用は母語によって有意に異なることが示され、日本語母語話者では「所有物受影型」と「事態実現型」の使用が有意に多く、「習慣的社会活動型」の使用が有意に少ないのに対し、中国語母語話者では「習慣的社会活動型」の使用が有意に多いことを指摘した。中国語母語話者と韓国語母語話者による誤用例と非用例を分析した結果から、有情主語受身構文の「視点の一貫性機能」、非情主語受身構文の「動作主背景化機能」、受身形式とテンス・アスペクトが絡み合った文を正確に習得することは上級レベルの学習者にとっても難しいことを明らかにした。